

第6章 学部学生の自学自習方式による
グループ演習の構成と展開
ー「教育実践基礎演習」の事例からー

大 隅 紀 和

京都教育大学

はじめに

大学教育の革新は、いつの時代にも求められてきた課題である。いまや、情報化社会に対応した大学の機能の強化や社会的な役割の一層の発揮が期待されているだけに、緊急を要する課題となっている。特に、教員養成系大学の講義や演習の方法と技術は、その本来の目的である新しい時代に対応した高い資質の若い教師を育成し、学校教育に貢献するという本来の機能を達成するものでなくてはならない。

すでに始まっている情報化社会は、大きな変化と発展が続くものと想定される。教員養成には、そのような時代を先取りする大胆な試みの必要が内外から要請されている。本稿で述べる学生の自学自習方式を取り入れたグループ演習は、必ずしも完成したものではないが、教育実践の基礎能力の習得を目指した演習の一つとして、長く模索してきているものである。大学教育の革新を配慮した試みの一つとして報告する。

I 背景と経過、および目的

大学における教員養成の主要な教育活動の一つには、教育実践の基礎技能の習得がある。京都教育大学では、西之園晴夫教授（現・鳴門教育大学教授）と山川信晃教授（京都教育大学名誉教授）などがながい間にわたって、この方面の取り組みを展開してきた。その代表的なものとして「教育実践基礎演習Ⅰ」および「同・Ⅱ」の二科目がある。筆者は、95年春に山川教授の後任として赴任して、この二科目を受け継ぐことになった。赴任後、筆者ら担当教官なりに工夫や改良を加え、手直しをしながら担当してきている。

その結果、受講学生の立場から検討しても、また担当教官としても、この自学自習方式によるグループ演習の展開に一定の成果と手応えを得ている。

1. 受講学生

対象の受講学生は、主として2年生である。3年生や4年生、ときには留年した学生も受講する。学生数は、特定できないものの約50名から70名、多いときは100名近くになる。この学生たちに週一回90分間の演習を実施する。演習であるからには学生数が多くても、なんらかの参加活動を組み入れる必要がある。それも、与えられた講義時間のなかで納めなくてはならない。さもなくとも学生たちは多様な科目を受講していて、それぞれに受講の準備、レポート提出などに追われている。

2. 多メディア方式の限界

約50名以上の大学生を一つの教室に収容して、黒板とチョークで講義方式の授業をすれば、どんな事態になるか。多くの大学教官が経験しているように、どんなに素晴らしい講義をしたとしても、有名タレントでもない限り遠慮のない私語と居眠りが見られるものである。

そこで、やむなく何らかの対策を講じることになる。たとえばビデオ映像を提示する、OHPでトランスペアレンシーを提示する、実物などを見せる、などの手段を使うことになる。

筆者は別の科目では、これらを多彩に活用する講義を心がけてきた。具体的には、たとえば OHP を 2 台同時使用して、マルチ・スクリーンで活用するなどの方法は、末武國弘東工大名誉教授などが盛んに推奨されている方法である。この方法もできる限り活用している。

しかし、この多メディア活用の講義でも、①教官からの一方通行になる。②学生たちの多様な反応を適切に受け止めて、適切に対応することは至難である。③学生たちは、すでにコンピュータ時代を経験していて、即時の双方向の対応を当然のこととしている。

これらを考えると、学生たちの学習活動を刺激するには迫力がない。受講している学生たちから質問を受け付けるとしても、時間に制約があり、数名の学生たちの質問に答えることができるだけである。学生たちの立場からすれば、毎時間のように消化不良で欲求不満が続くのではないだろうか。

大学だけが高等教育の役割を発揮していた時代は、それでも通用した。しかし、今日のようにさまざまなメディアが高等教育水準の情報や資料をふんだんに提供できる時代には、学生たちには大学の講義の多くは、退屈なものになってしまうのかも知れない。

3. 必然的な自学自習方式

これでは、とても先進国の高等教育とは言えない。結局は、一人の教官が多数の学生を相手に一方的な講義をすることに無理である。

特定の知識、概念、技能を適切に身につける。そのための教育方法を徹底的に検討する必要がある。その方法は、一つではない。いくつかの典型的な方法を組み合わせなければならないと思われる。もちろん、その一つとして従来の講義方式も採用しなければならないだろう。

そのような検討を続ける過程で到達したのが、本稿で述べる自学自習方式によるグループ学習である。その根拠としているのは、つぎの点である。

- ①. 学生たちは、みずから学びたいという欲求を持っている。
- ②. その欲求がある限り、十分に計画し検討した題材を与えれば、みずから解決していくとする欲求に発展する。
- ③. 彼らのうちの何割かが、近い将来に教職に就くことを想定すると、現実の課題に当面する多くの場面で、みずから問題解決を経験させたい。
- ④. 現実に学校現場では、そのような積み重ねが教職の経験となり、蓄積となっていくのである。
- ⑤. そうであるならば、教育実践基礎演習の科目では、学生たちには十分に練り上げた取り組みべき一連の課題を用意する。その実施は講義方式では無理であり、グループ活動を通じて、みずから問題解決していくように配慮したカリキュラム・デザインが必要になる、というところに到達したのだった。

II 自学自習方式の枠組み

この自学自習方式によるグループ学習の概要は、つぎに述べるとおりである。

1. 対象学生と開講科目

この科目は選択必修科目である。学生数は、約50～70名程度。週1回、90分授業。前期と後期に開講していて、授業回数は16回を予定している。しかし実際には大学行事や祝日のために、約12～13回程度になる。これ以外に、希望する学生には30名を限度として、附属小中学校での授業参観を行う。

この演習は前期に2班、後期に2班で、合計4班。各班が60名として、年間に240名が受講できる。

2. テキストとテキストの構成

B5版、117ページ。扱われている表題は、表1のとおりである。各表題ごとに、概要(short discription)、ねらい、時間配分を明記した演習のステップ、ステップごとの活動内容と指示説明、参考事項、留意点、参考図書リスト、自由課題、レポート様式例などを記述している。

このテキストによって、各グループの演習活動が円滑に展開できる。このテキストの試作開発には、先に述べたように西之園晴夫教授、山川信晃教授らの長年の取り組みが集約されていて、後任の筆者としてはおおいに感謝している。

表1 テキストの構成

1	オリエンテーションと班づくり	1
2	相互理解とコミュニケーション(1)	9
3	相互理解とコミュニケーション(2)	17
4	教育実習のための資質・能力	25
5	授業参観の着眼点	31
6	マイクロティーチング	37
7	板書の基本	45
8	カード・チャートの利用	53
9	黒板・カード利用の模擬指導	59
10	OHPの利用	65
11	OHP教材の作成	73
12	OHP利用の指導	77
13	発問の基礎1 (分析と計画)	83
14	発問の基礎2 (準備と実施)	91
15	発問の基礎3 (分析と評価)	97
16	授業参観と記録	103

3. 学習環境

適切な学習スペースは、この種の教育活動のための決定的な条件の一つである。毎回の演習の開始時には、学生全体に対して前回の活動に対するコメントを伝え、当日の活動の目的と概要を簡単に説明する。

また学生全体に対して、カードやチャート教材の制作と活用、教育実習の準備などのトピックスではグループ活動に先立って、あらかじめ用意したショート・ビデオ映像を提示している。

毎期、受講する学生数は一定ではない。担当教官から大学事務局の教務係に受入れ希望として、1回あたり約50～60名にするようには申し入れている。しかし時には70名、80名ということがある。そのような場合、たとえばグループ演習活動などでOHPの教材を作成して各グループでマイクロ・ティーチングをするには、一つの演習室では不可能になり、1階と2階の二つの演習室に分散して行うことにしている。

4. 機材の管理

使用している学習スペースは、教育実践研究指導センターの多目的室である。ここでは、この演習だけではなく、一週間のうちには各種のミーティングなど、さまざまな機会に多様な使用がされる。そのため、演習にあたっては毎時間各グループでテーブルと椅子をコーナから用意し、グループ活動が終了すれば片づけることを基本ルールの一つとしている。

各グループが使用する各種文房具を収納した道具箱、学生たちが必要なときに参考にする小中学校の教科書と図書、OHP、小黒板などは、すべて各グループが収納場所から持ち出して使用し、使用後は後片付けをするように指示している。

Ⅲ グループ演習の展開

グループ活動を円滑に展開して実りあるものにするためには、事前に十分な準備が必要になる。特に、十数回ものロングランで演習を行うために、全体計画とコーディネーションに配慮しておかなくてはならない。

グループ演習中の担当教官の活動は目立たないものになるが、その背後には時間と労力を費やした準備活動が必要になる。また、小規模な修正作業などにも配慮しなければならない。

1. グループ内の役割分担

グループ活動が主体になる。その展開に、数名の教官が細かなところまで対応するのは無理である。そこで、あくまでも円滑な展開ができるように、各グループで役割分担を決めて、主体的に展開ができるようにする。この点が、グループ活動の決め手になる。

①. 司会役 司会役は、従来のグループリーダーではない。各時間のグループ活動を円滑に進行させる役割を持つ。指導教官との連絡も司会役の担当である。グループの全員が司会役を援助するような雰囲気を持たせるようにする。

②. 時間係 各時間の演習では、特定の題材について時間内で活動が終わるように、いく

つかの活動を時間配分している。グループで自由討議させると、どうしても長引くことが多い。その場合も、時間係はタイマーを持ってディスカッションを打ち切るとか、グループ討議を収束に向かうように指示する役割を持たせる。

③. 教材教具係 各時間に使用する教材教具や消耗品を教卓や準備室から、みずからのグループに配付する。終了すれば後片付けをして、元通り収納をする。

2. 教官の役割

教授、助教授、助手が各1名、合計3名で指導にあたっている。グループ演習の活動では、実質的には助手1名が演習室に常時に残留して、学生指導にあたっている。教授と助教授はときおりグループ間を巡回して、個別にコメントするなど助言活動をしている。

巡回指導をして気付いた事柄などは、その都度グループ活動に加わる形でアドバイスする。こうすることによって、教官と学生の個人的なコミュニケーションも講義形式では考えられないくらい促進される。

3. ショート・レクチャーの実施

グループ演習活動を主体にすると、時おり必要な時期に取り入れるショート・レクチャーは、極めて効果的である。担当教官としては、グループ演習の進行につれて一つのグループの成果を全体に紹介したい場合がある。また、いくつかのグループに共通する傾向や問題点を全体に指摘しなければならないことがある。そのような場面で、適宜グループ活動を中断させて、レクチャーを行っている。

4. グループ活動の展開

一回90分間、十数回つづく演習の具体的な内容は、限られた紙数では詳細には紹介できない。そこで、代表的な場面に限定して述べる。

- (1). オリエンテーション ここでは暫定的なグループ分けをするとともに、学習方法、テキストの使い方、出席カードの記入など、基本的なルールを説明する（写真1）。
- (2). 感受性訓練を取り入れたグループ作り 学生たちは互いにグループのメンバーの顔と名前を覚える。また短い自己紹介をする（写真2）。
- (3). ゲーム指導による相互理解 用意されたゲーム、自分たちで工夫したゲームをする。ここでは、たんにゲームを楽しむだけではない。将来、教職に就いたとき、児童生徒の相互理解や相互啓発をさせる場面を想定している（写真3）。
- (4). トラストワークによる相互コミュニケーション 学生たちは二人組になって、一人は目隠しする。テーブルコードを持った学生がガイドして、計画したルートで校内を歩く。相互の立場の違い、適切な指示や説明の大切さなどに気付かせる（写真4）。
- (5). 附属中学校の授業参観 教育実習のビデオ教材の視聴活動とあわせて、希望する学生たちは実際の授業の様子を附属中学校、附属小学校で見学する。毎回30名を限度としているが、参加希望する学生は多い（写真5）。
- (6). 小黒板を使うマイクロティーチング 各自が黒板に提示するカードやチャートの制作

活動を行い、続いてグループごとにマイクロティーチングを行う。相互に批評し、コメントしあう。教官が介在しないほうが、積極的な活動になる（写真6）。

(7). TPシートの制作 各自がOHPを使うためのTP（トランスペアレンシー）を制作する（写真7）。

(8). 学習指導案の検討 制作しているTPを使うマイクロティーチングに先立って、グループで各自の学習指導案を検討する（写真8）。

(9). OHPを使うマイクロティーチング 各自が準備し制作したTPを使って、マイクロティーチングをする。学生たちは、さきに小黒板を使ったマイクロティーチングの経験をしている。これが二回目のマイクロティーチングになるので、かなり進歩していることが自他ともに認められる（写真9）。

(10). ショートレクチャーの実施 演習の展開の状況を見ながら、必要な場面ではショートレクチャーを実施する。これによって、教育実践の基礎技能を獲得していくための心構えや基本的な考え方の徹底をめざしている（写真10）。

Ⅳ グループ演習の特色と成果

当然ながら、この演習では、どの時間も一斉講義では見られない活発な雰囲気が漂う。

実際には演習室に入ると、ずいぶん騒がしく見える。しかし、その騒がしさは、それぞれが真剣にグループ活動をしているためであり、よほどのことがない限り各グループ討議の邪魔にはならない。討議に行き詰まっているグループには、別のグループの活発な状態が刺激になり、また競争心を刺激することになる。このようなグループ間の相互作用は、この演習の特色の一つである。

1. 高い学習意欲と参加性

この演習が目標とした学生たちの学習意欲と参加性を高めることには、現在のところ成功していると考ええる。まず、正統な評価の指標にはならないが、学生たちの私語や雑談、居眠りは、ほとんど見られない。

しかし演習の初期は、学生たちに戸惑いが見られる。まず講義は少なく、あってもごく短い。一斉に指示される事柄も少なく、あとはテキストとグループの仲間で特定の活動に取り組むことになる。このような自主学習は小中学校、高校で、そして大学に入学してからも経験することがなかった学生が多い。慣れない学生たちも、数回もすればグループの仲間の顔、名前、そして性格などがわかってくるとグループ活動はずっと円滑に展開するようになる。

2. 評価の方法とレポート作成・提出

この演習の指導教官側の課題の一つは、評価の方法である。多数の学生が、それぞれに熱心に演習に参加し、グループ活動に取り組む。そして、たとえばマイクロ・ティーチングには、事前に十分な準備をしたうえで展開する。その一つひとつは貴重な実践であり、近い将来の若い教師には、教育実践のための基礎的な段階での活動として記録し保存しておきたい

くらいの取り組みになる。

このような事情から、画一的な評価はできない。できることは、出席点とレポートの提出回数を単純にカウントすることくらいである。ただし指導教官としては、これで良いとは決して考えていない。今後は学生たちが、この演習で学んだ知識、概念、そして技能を明確にするためのショート・テストを実施することの必要性について検討しているところである。

3. グループ・レポートと個人レポート

この演習では、各回のトピックスについてグループ・レポートと個人レポートの課題を用意している。それらはテキストに記述されていて、レポートの記述様式も掲載している。それでも、実際に提出されるレポートはバラツキが多いのが実情である。

望ましい筆記具を指定しない限りは鉛筆書きのレポートが多い。用紙としてA4版を指定しても、B5のレポート用紙で書いてくる。なかにはカバーレターも付けない学生がいる。多数の学生のレポートをファイル綴じするのに左側マージンが十分でない書き方をしているレポートには困られる。また論旨が長く、箇条書きを使うことが望ましい場合も多い。

すなわち一般的に、人に読んでもらうレポートになっていない学生が多いのである。これは何も、この演習だけに限ったことではないと思われる。レポートの書き方については大学生時代にきちんとした訓練が必要である。残念ながら大学教育の一貫として、一定の指導が必要な事態を痛感している。この演習がどこまでかわり合うか、教官側の課題の一つである。と同時に特定の演習だけでは、とてもカバーできる事態ではないことを思わずにはいられない。

V 今後の課題

この演習は、まだ決して完成したものではない。むしろ、実施しながら変更、修正、改良を加えていくべきであると考えている。つぎに述べるように、いくつかの課題がある。

1. 導入時のガイダンスの必要性

この部分は、今回放送教育開発センターの研究活動に参加することによって、十数回の演習のハイライト部分をビデオ映像に収める試みを行った。このビデオ映像を新しい学生たちを対象にしたオリエンテーションで提示して、この演習の全体の流れを理解することにしたいと考えている。

このことは本演習だけに限らず、学生たちはさまざまな講義や演習の開始に先立って、その講義や演習が具体的にどのような展開をするのか、実際に受講してみなければわからないという不安が大きい。先輩から噂として聞くのが、最も確実な情報というありさまである。そうではなく事前にオリエンテーションの段階で、全体の展開の見通しを与えることは、極めて大切なことと考えている。

2. 学生に対する評価方法

これまでは主として、(a)出席点、および(b)レポート提出点によって、学生の成績評価をし

ている。しかし現実には多数のレポートを詳細に読むことは、時間と労力を必要とするうえに、学生へのフィードバックにも時間がかかる。担当教官としては、この方法で必ずしも満足しているわけではないし、また適切とは言えないという反省がある。このグループ演習にふさわしい評価方法を工夫し、検討したいと考えている。

3. 題材内容の点検、修正、充実

この種の演習活動は、その題材内容と方法について、つねに点検し修正し、新しい題材を開発していくことが必要であると考えている。短い期間ごとの点検と見直しは、学生たちの教育に欠かせない。たとえばオリエンテーションの時に、ある程度学生たちが選択できる複数のコースを用意して、それによって複数のコースを展開するような方法も試行することを考えている。

4. 基礎的内容から発展的内容への接続

この演習に関連する科目に「教育実践基礎演習Ⅱ」がある。これは主としてコンピュータ利用、ビデオ教材制作を内容としている。現在のところ演習Ⅰと演習Ⅱは、必ずしも相互関連づけを考慮しているわけではなく、若干の発展的な題材と方法を考えてはいるが、多数の学生に教育実践の基礎的な能力を教育するために複数の機会を用意しているだけである。

この二つの演習の相互関連づけをして、基礎的な内容から発展的な内容に接続していくことを課題としている。

5. 学生の個人研究への発展

学生たちのなかには極めて熱心に、この演習活動に取り組む者が多い。これらの学生向けに個人研究活動に発展できるような工夫や仕組みを用意することも課題である。

Ⅵ おわりに—インターネットと遠隔教育時代の大学教育

ここに述べた演習は、以上のようにいくつかの課題を抱えている。最も基本的な課題は、この時代にあるべき教育実践基礎能力とは何か、ということである。もちろん、必要な知識と概念もきちんと獲得させたい。そのための工夫や努力が必要である。

一方では、いまや21世紀を目前にして、私たちはまったく新しい情報交換の社会基盤としてインターネットを使い始めている。また通信衛星を使った遠隔教育も試みられている。これらによって、教育活動にもさまざまな可能性が期待されている。一つのパソコンが、世界中のパソコンと対等につながる。これによって情報の交換や流通は画期的に活発になる。これに対する高等教育機関の期待も高まっている。

しかしインターネットや遠隔教育が普及することは、現存の高等教育機関に厳しい自己点検とリストラを生み出す可能性も高い。すなわち、われわれは先進情報技術に乗せる価値のある、それに耐えるだけの教育活動や教育内容を、どれほど持っているのか。それが鋭く問われる。恐らく強烈な個性的な行き方をするアプローチを取り、内容面で十分に充実したものが求めら

れるにちがいない。

一定の水準の越える教育活動と教育内容を持つ授業のほかは、見返りもされなくなるという事態が生じる可能性がある。大学教育の革新、ファカルティ・デベロプメントは、21世紀に向かう大学への大きな課題である。そのような検討材料の一つとして、本稿の自学自習方式によるグループ学習がある。この方式が完全なもので、これだけで事足りるなどとは決して考えていない。むしろ短い期間ごとに題材、内容、方法について点検し、修正し、学生たちにも指導担当教官にも新鮮で活力のある展開ができるように、継続した工夫と努力を続けなければならないと考えている。

さらに、一つの科目で完全な形の教育活動が実施できるわけではない。いくつかの関連教科目が相互に連携した展開をするとき、はじめて総合的な効果を発揮するものと考えている。今後は、そのようなリンケージを学内と学外を問わず、また国内と国外を問わず、おいおい広げていきたいものである。

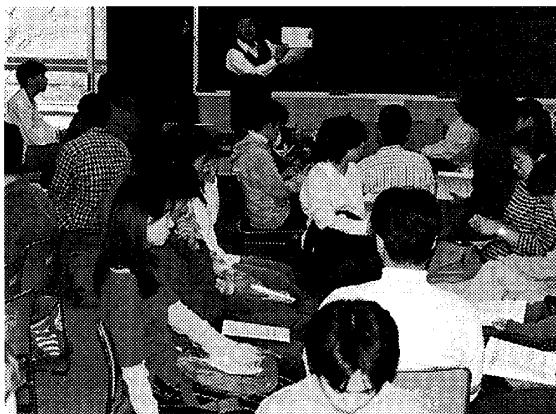


写真1 オリエンテーション



写真2 感受性訓練を取り入れたグループ作り

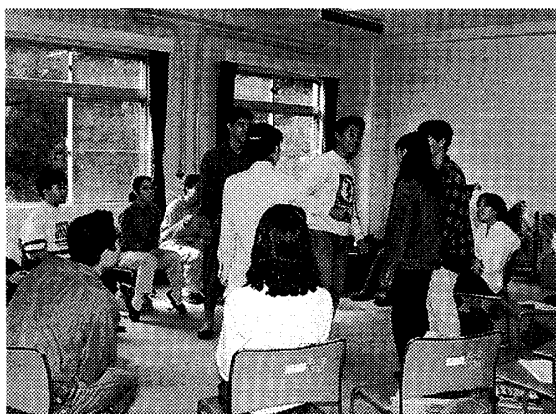


写真3 ゲーム指導による相互理解

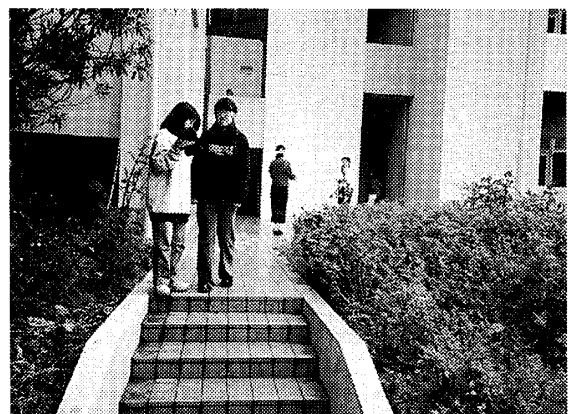


写真2 トラストウォークによる相互コミュニケーション

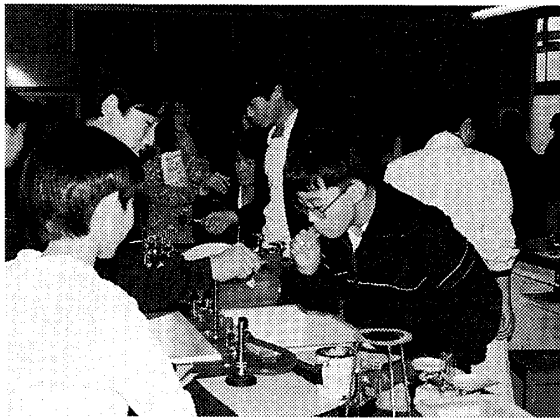


写真5 附属中学校の授業参観

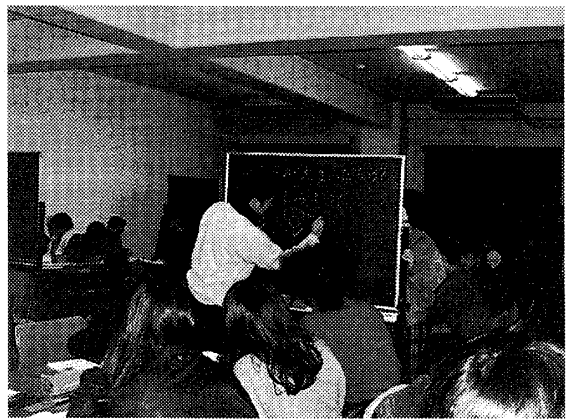


写真6 小黒板を使うマイクロティーチング

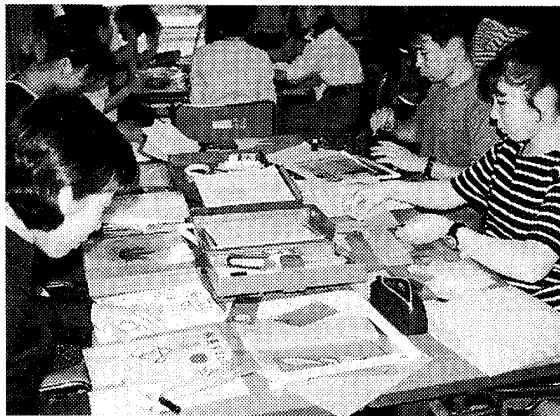


写真7 TPシートの制作

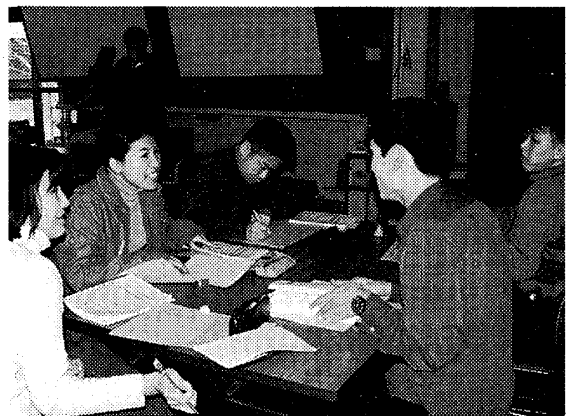


写真8 学習指導案の検討

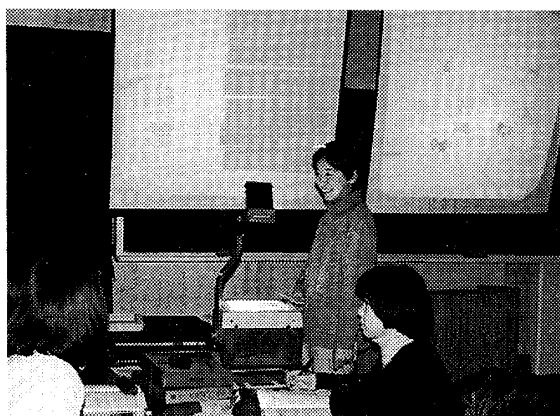


写真9 OHPを使うマイクロティーチング

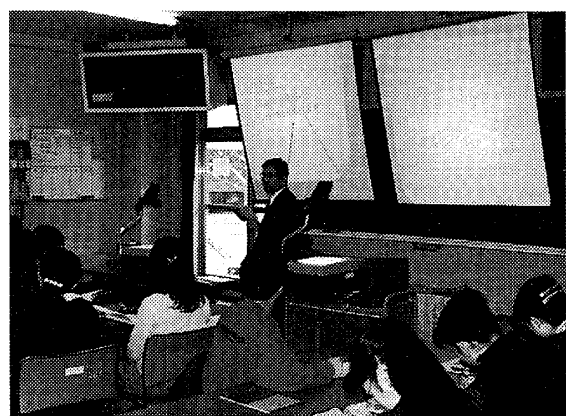


写真10 ショートレクチャーの実施

(撮影：大隅、宮田)